

ば今の禮法の八杯豆腐香物茶づけ、實は可笑の甚き事にて、妻妾を具有するものは、夜食には肥肉醇酒を飲食して、氣力を張旺ならしむべきこと攝養の術なり、

〔梵舜日記〕慶長八年正月卅日丁亥、於二位卿祝衆へ圍碁興行ケン物、鳥目廿錢勝負、晚食。在、五月廿

二日、於豐國二位宅勝負碁興行、懸物三百刑部豐後兩人、晚食。用意申也、禰宜祝已上廿二人也、

〔言經卿記〕慶長八年二月二日己丑、伏見へ發足、先豐光寺免長老へ罷向、略申刻令同道登城、ヤガ

テ内府家康出座、奥座敷也、夕、喰御相伴了、入夜五六人同振舞有之、濟々之儀也、

〔運歩色葉集地〕晝食チウジキ

〔易林本節用集地〕晝食チウジキ

〔倭爾雅六〕饌ヒルシ

〔物類稱呼四〕晝食 畿内にておこいといふ、南都にてけんずいといふ、今按に、東國の農家に

て、午未の刻の間に食事爲を、こぢうはんと云、或村老の云、晝食をこぢうはんとなづくるは、午時

半と云意なりとぞ、予おもふに、農民は形を勞する事はなほだしければ、日の長きころは、ふた、

びも食すべし、再びめの晝食なるが故に、小晝飯なるべしや、駿河國にて、やうびいと云は、夕晝

飯の轉語にや、土佐の國にて、こびるといふ、是におなじ、土州にては、晝食をひるまといひ、ひる

り夜食をよいと云、夜飯上總下總にて、こうだいごろと云は、是は晝飯をいふ、こうだいとは、汁

〔柳亭記〕晝飯の事

朝飯夕飯が三度となりしは、田舎より起りし事なるべし、農民はことに骨をればなり、今は小中

飯ひとなへ、日の長き頃は四度喰田舎あり、中飯又晝飯といふも、則田舎詞なり、今も心あるもの

は晝に喰を夕飯となへ、夕に喰を夜食といひ、晝飯といふことをいはず、略柳翁曰、間食は則

中飯、延喜式に見えたるは給ふなり、靈異記なるは私に喰ふなり、酒を醸し稻を舂くともに骨折

晝食